

はなく少し脊が曲がつてゐた、年は四十二三かと思はれた、体はといへば体操學校出身とてどつしりとしてゐた。先生の悪口を列べる譯ではないが、ごちらかといへば先生は少々不精とでもいふか不規律な方であつた。まあ煙草がなくなれば校外へ買ひにやらすとかいふ風に何事も先生は行き當りばつたりとその時になつて急に物事を片付けるといふ風で、僕等もよく先生の買物に校外へ走らされたことがあつた。又先生は僕等から見ると實際陽氣さうに見えて居たがその實は割合に氣苦勞をして居られたらしい。洋服といはゞいふものでいつ新調されたやら古いものを着て終始一貫それで得意になつて、赤い鼻緒の草履を引掛けて校内を歩いて居られたものだつた。

或時僕は二人の友達と一諸に先生の口眞似をやつて喜んだ事がある、すると其の事を誰か先生に密告した、さあ大變時間がすんでから僕等三人は教員室に呼ばれて大叱言を頂きその上に直立を命ぜられた……電燈がともつても一向に免される様子が無い遂々三人恐るゝ御機嫌を伺ひにいつて又散々絞られた揚句免された。所がその翌日になると何時にも似合はず、

「いつか亦遊びに来て呉んな」と故郷の訛りで前日の事は忘れたやうに親しく言葉を掛けられてにつこり笑はれたことがある。

此んな風で私はT先生が嫌ひな時もあつたが又好きな時もあつた。だから此の恩師のT先生の事は僕の頭からはいつも離れたことはない、又忘れられないのである。實際私にはT先生に何處か親しみ得られた處があるように思はれる。それで今でも時々T先生は何處でどうして暮して居られるか知ら、無事で居られるかしら等とそれからそれへとT先生の事を思ひ出す事が屢々ある。(完)

夜の雨聲を聞く

「初秋一情景」

高祖 保

碧梧桐の葉を打つ秋さめの聲をきく。本當に、ひそかだ。はつ秋らしい清しい雰圍氣の裡を、ほそぼそと梧葉のこんもりと繁り茂つた上へ散る、そのひとしづくそれを聞く。きく耳へ絶えずさゝやかな音律となつてしのびこむ——初秋の蕭洒たる夜陰の雨。

(カラコロ、カラコロ——)

書齋の庭ごしの表道を高下駄がどほる。どほりすぎると四圍が、ぼつたり暗くなつたやうだ。蕭條と冷たい大地を洗ひ乍ら、落葉の聲を喚びつゝ地の底まで沁むであらう雨の、滅入るやうな私語！

南天蜀の青い陰影のうちから篠竹の冷びねした幹が、珊々として地上の溜り水へ映つてゐる。

「ひとときは夜ちかい雨の黄昏。」(なるほごう?)

さう想ひながら、ぼやけたごとく點いた灯の書齋へ、ぼつねんと考へ込む。——外で頻に雨が、木の葉をびちやくたゝいてゐる。どうもそれらしいおど。

……ばら／＼と葉から葉へすべりわたつて行くであらう泪滴のさわやかなおど。また雨しづくに重くなつて、しなへなびき、さやさやと二葉三葉のさゆるゝおど。——(さて何處邊の木であるか、少しも見當が附かないのに。……)とおもふ。

わたしは、「雨奇晴好」とか「晦明雨陽」とか云ふ風景よりは寧ろ、病鬱な陰翳の裡のやうな感情を有つ夜陰の雨などの情致を好む。だが幼ない時分の華やかな華美に流るゝ位の好みも、冷つこい心の奥そこに残つてゐないとは限らない。譬へば、冬夜、生じろい蠟燭の

心へ火を附けたとき、長い間の眠りからさめたその炷は、ゆらゆらと灯された以前の形にまで返るやうに。

いつだつたか記憶しないが、旅行先の一旅館から——二階の前栽向きの一室だつたと想ふ——可なり大きい密柑の、黄ろい實が、秋さめのなかを濡れて底光りを出してゐた。母と二人で長い間それを見てゐたものだから、其の二三日後、誰が鉢を入れたのか、くろぐろと悲しい葉並みの茂りがうそ寒い時雨の中にあつたそれを見て一寸、さみしくなつて心を暗くしてしまつた事もある。追憶もそれきりだつた。

わたしは一体小さい時分から「夜雨」と云ふ、或る落ちついた感じを放つ静けさが好みだつた。「黄昏の雨」もいゝだらう。こゝろ想ひ乍らも、あはたしく過ぎ去つて行く一日のなかの、また雨の日を省みても其の黄昏のなかを獨り充分考へこんだ事は先づない。

雨のH！ 雨の薄暮！ 雨——あめ、

自分はそれを待ちつゝ早やくれ近い街頭、露地の上へも一めんにおつかぶさるべき、この低く垂れた暗い雨雲を、何か、凝つと眺めてゐた。

どうか。……あの蕭條たる雨空の下をたとへ空虚な

想ひを引きすりつゝも、放浪な儚い漂泊をつゞけては或は、満たされぬ此の世のつれなさを、グアイオリンの三條の糸にまぎらし、箇々の家を流して歩く人たちの心裡。(!!)それにしても、矢張り雨空の何か斯う云ひ得ぬ空の下をくゞつて行く氣持ちはどうか?)

わたしは、そんな方面のことも空想を馳せたのだつた。もちろん、こうした夕闇のなかを――

――青梧桐の廣葉をうるほす雨滴。べたべたと……

――松の葉、針葉樹の鋒先を光らして夜目にもさ、やかな雨。つるりつるりと迂り落ちるしづく。

――南天のつぶら實をぬらし葉を濡らし、びちやつとおちる雨。

――秋海棠、カンナ、鳳仙花、白菊、百日草、桔梗……それらに濺ぐ雨。………涙滴。

空想は空想を生んで雨夜のつれづれを消す程の力も持たない。併し疲れた頭とたるんだ瞳で、外の微細な一葉々々の律動にまでも聞き入る一種、敏感に神経がうごくときは矢張り或る活氣を催さしめるものだ。

空想の上へまた空想を重ねよ、おつかふせるやうに。厨の流しもとで蟋蟀が鳴いてゐる。八月廿八日に關西

ない。たゞ變に便りないやうな空氣に浸つてゐるだけである。どきどきにししと十一時、十二時ごろまでも原稿の上へ筆を走らしたりする。夜は書くのにも、想ふにも甚だしい、時である様だ。

傘を採つて街に出る。

しとしと……夜雨が街頭の灯のかげを、光りつゝ、また滲ない暗闇に掻き消されて行つて了ふ。驛の空しくほのかに夜雨のなかに明らんだあたりへ汽笛が鳴りわたつた。――雨の夜汽車。旅人のむれ。……

幾百のさみしい者、楽しいもの。悲しい人、喜ぶ人、それらを戴せて、無意識に闇中を、廣野より廣野へと涯なく走りさる夜汽車。あゝ、汽車よ!

「夜汽車の行く手にも幸あれ。」

自分はさう頭に描き乍らぬかるみを拾つて、あたかもうつ、けたものゝやうに明るみへ歩るきだした。

永遠への思索。遠い過去への追憶。

現在より、永遠の空へ。遠い過去のあらゆる汚濁物を載せた「時の精」が、恐るべき速力で近づきつゝあるかの如く降る――雨。くるくると傘を廻しながら四隣の夜の闇へ雨滴の幾しづか投げ入れるのだ。人の世

旅行の出行をしたとき、秋らしい虫は一つも聞けなかつた。さて。一日の早朝旅行から歸る。するとわたしも一寸驚いたのは、秋めいて蟋蟀のいないでゐた事である。(何て早く時が経つんか知ら――?) 私はつくづくさう思はざるを得なかつた。それに最う百舌も聞ける季節である。背戸の並立つた柿で聲さねざねと夕ぐれに空氣に響きわたる、あの透徹したうちに一種の滋味を帯びた百舌の鋭さは好ましいものだつた。秋が濃く色づいた柿の葉と一處に、深んで行くにつれ、冴わた音色が山野と云はず小都會の空まで聞けるのだ。はつ秋の雨も随つて次第に冷つくある秋寒むの感じを傳へる、遂には初冬の氷雨などに變つて行く。でも秋雨にとち込められた憂鬱な一日は、書齋にでも入つてはれん、しいやうな本を物色するのが常である。ひそ……ひそ……と、落葉などに際だつて降りかゝる雨音をかぞへ、雨戸をゆるする風めいた秋風を聞くときは、肌さむい書齋の空氣のなかで火鉢を抱き乍ら遠い郷里の情景を空想の意識の上へ、繰り擧げてみたりする。忙しき、寒しき、病鬱そんな感情を持ちつゝ別にそれがわづらはしいとか、限りなく苦しいと思つたことは

の文化を嘲笑しつゝ己もまた凋落してゆく「時」の生命ふり積り消ゆる闇の堆積。暗黒の灰いろの裡に唸りまはる寂寥の聲。死の土。地上、空間に間斷なくめぐる壯大な無形の理想宮。………空想の肥大する経過。そこに無限の沈黙とおそろしい虚無の世界がある。明暗の片影だに認め得ぬ空間と不可解の暗影が、かつて「無」の足跡を印して、闇から闇へ、空間を轉々流動して行つたのだ。あ! 地上文明の老衰より來たす凡らゆる大恐慌。無數の死と、不意味な人生の殘骸を戴いたまゝ、遙か無限の虚空へ消え去つてゆく「時」の運行………人生快樂の地上の遠い永遠は何であつたか。過去、現在、その中より亡滅し去る者は何か。永遠が近くに訪れきたる結果、如何様の現象を來たすか。だがそれには餘り自然は慈悲ぶかく、丁寧であつた事だ! 春を配り夏を置き秋を招いて果ては人間一年の終結に冬を以てした。斯くし斯く在つた後、年きたり、めぐるごとに儚い人生の惡夢と共に、幾多ひ弱い人間が死の堆積を造つて行つたのだ。年はつのも、世紀が轉じ、大地の幾めぐりかの間を、地上では様々の遷變をなした。その轉々の果は何か。斯くの如く人間は弱

い、斯く地はめぐりめぐる、だが併し自然は永遠に變らず、盡きせず、且つ偉大である。「時」を持ち「無」を有する自然は、何處までも人間界を脱離しつゝ悠久な己れの大きさを、ある美を、誇るべき力を有するものだ。その自然の使命それはなにであるか。残忍なる使命の前に、人工科學在りと在らゆる人間界の事物は破壊しざるべき「力」ただそれだけしか持ち合せてゐない何たる貧弱さだ！ 彼の大地一搖らぎの前に、充分反抗し得たものは何と何であつたか。……自分はそれに答ふるのを躊躇する。絶対に永久的なものを人間知識より拾ひ出すのに果してそれだけの年月を費したらいゝか。先づその邊の力しか人間の生み出して行く、自然へ對しての實力は、あやふやである。少くとも自分はさう思ふ。

斯くも儂いものであり、また無力であることを悟つた人間の一人が「神」を見つめた。假想でもあれ、その物が實現せずともあれ、力として精神的の援助、內的の心強さを感じて生きて行くと云ふことを考へたのは可なりいゝ事である。確に實力以上の効果をその經過に於て舉げるに充分だつたに相違ない。而してその一

人から幾部かの物に「神」の信仰なる一事が傳へられ、今日に及んで來たものであるのだ……！ 自分はそんな空想を描いてもみた。

ひね／＼した夜更けの冷氣沈々たる雨中に佇んで、小さいものが今その存在を知つたかのやうに、自分の姿を始めて省りみ、ふり返つてみたのだつた。……「生」とは何か。「死」とは何か。また存在とはなにであるのか。……そんなことは如何でもいゝ。それが例へこうであるにしろ、さうであるにしろ、今更自分へ對して何たることもない筈なのだ。それこそ自己關涉外の思索の一端にしか過ぎない筈なのだ。

わたしは歴史上の英雄或は豪傑として、多少その性格、事績などを世人に知られた人びとの大自然に對しての小ささ、をおもつた。そしてまた自分の小ささを比べてみた。……しみじみと秋の夜雨の街上である。

「今頃まで父が居ようものなら……」

さう考へたとき、瞑想ごきのやうな、愁傷めいた寂しさをうつすらと肩の邊にかんじた。——同時に。

「自分は九才の幼齡で父を離れてから、外面的に、幾らか性格に及ぼすあるものを知つて來た筈ではなかつ

たか。」と。……遠い過去から、永遠に亘る永劫の人生の不可解と苦惱とは誰しも感じて來なければならぬものらしい。自分は若い。自分は內面的に心を覗いてみるが、いゝ。果してその基礎とすべき何物が有るや否や。自分は本當に、夢幻泡影裡に立つ一箇のさみしい異端者のその心を、自分の心として、さみしい者へ、かなしい者への同情を有たねばいけないのだ。「

おお！ 影を、影を見たまふな！ 雨のかげを。」蕭々として落つる雨。夜の微分子。針のごとき神經。大地をめぐる悲慘な愁嘆場。冷つこい影繪。右往左往する泥濘の上の雨の難題。疲憊、萎縮、恐怖などの重たい空氣。そしていろ／＼褪めた風景の冷却。

（抽象を去れ！ 現實の存在に目ざめよ！）なんと今夜のさみしいこゝろの嘔きなのか？ 一本の「敷島」を焦りもせずじりじり焼滅してゆく火の力。あの展望涯ない大地を、一滴々々の集團を以て覆ひながら、しづかに濡らして下ふ水の息吹き。畏怖。

「土を掘れ！ かなしい幽鬱を洗はう……。」雨のこね。わたしをめぐる雨のこるこるを、聞け！ おゝ今の夜。

そのそれ、これのこれ、それらを包む暗黒の閃き。風の脈搏つごとく、ひっそり空しい耳朶うつ空間の韻律ながめ、かんがへ、うつつけて雨きくか。

野末から吹き送るはつ秋の夜風に、足下の穗波が。さやさと音をたて、なびきわたつた。雨だ！ わたしは不氣味な心地に甦ると、ぐりつと傘を大きくふりまはした。……それにつれて幾滴かの粒つぶが、一度にばらばら四隣へ散じて了つた。

生き看板 (幼き頃の思出)

中川英一

街頭の藥賣りはもう先刻から、色々と實驗めいた事をして、藥の効き目を證據立て、ゐる。そして最後に群集を見廻しながら言つた。

「さア此の中で齒の痛い人、目のわるい人、手足のしびれる人、胃腸のわるい人、何でもよい、わるい所のある方は、ごなたでも暫く此處へお出で下さい。此の藥で直して上げるから」と。

彼は奥齒が痛んで仕やうがなかつた。口へ指を突ッ込んだり、顔をしかめたり、頬の上から齒齦を揉んだ

りしてゐた。羨しさに薬賣りを、薬の列べてある臺の側から眺めながら――。

「誰も出て来ないのか」じろり薬賣りは、群集を見渡したが「じゃ俺が探してやらう」さう言つて薬賣りは臺の前を離れた。と彼の心臓は或る不安に微に戦きはじめた。(もしも齒の痛いのが薬賣りに見付かつたら………?)彼の或る不安とはそれであつた。で、彼はその場を逃げようとしたが、澤山の人で動けさうもない。それで彼はもう群集を分けて迄逃げやうとは思はなくなつた。そして(もし見付けられたらそれ迄だ。直されても損ではあるまい)と考へた。彼の心は聊か大膽になつた。それでも成るべく薬賣りに見付からぬよう痛さうな振をせぬやうにして、じつと薬賣りを眺めてゐた。

薬賣りは彼の前に立ち止つた。彼は俯いてゐた。彼の鼓動は時めく。逃げたいにも逃げられない。彼はそこにじつとしてゐるより他なかつた。

「坊つちやん、齒が痛いんでせう?先刻から痛さうだつたから」

薬賣りは彼の頭に手を載せて言つた。矢張り薬賣りは

回みへその綿を詰め、その上へ更に乾いた綿を被せた「三分程さうしてゐると直るから……さー他にもう誰もゐないか」

薬賣りは又言ひ出した。が誰も出て来る者は無かつた。薬賣りももう、強ひて探さうとはしなかつた。

綿に泌めてある薬が、つと舌の上へ滲み出た。その刺激!その苦味!彼はバツと唾した。とそれを眺めてゐた薬賣りは苦笑しながら言つた。

「毒じやないよ、呑み込んだつて。内臓にも薬だから」暫くすると熱するやうに、齒の熱くなるのを彼は覺えた。すると次第――に齒の痛みの失せて行くのに氣が付いたが、熱の爲に齒の自由が利くかしら、と思つた。彼は群集の方に顔を向けず、じつと無意識で薬壘を見たり、彼方の板塀を眺めてゐた。そして口の中では幾度も――その齒の上へ舌を動かしてみた。彼は、彼が何だか人形の様だと思へた。薬賣りは物待ち顔に、彼を見つめてゐた。靴先で路上の石を蹴つたりして――臆て二分許りもすると、痛みは全く失せてしまつた。彼はそう感じた。

「痛みはさうだね。直つたら取つてやるから」

齒の痛い事を知つてゐたのだらう。それで否とは言へなかつた。彼は頭を擡げて軽く首肯した。

「もちつと眞ん中へ出なさい。直してやるから」。

彼の薬賣りに對する不安はもう無くなつた。彼は言はるゝ儘にした。彼の頬はほてつてゐる。チラと群集の方を見ると、彼等の視線はすべて彼に注がれてゐた。彼は羞恥を感じた。けれどもそれも暫くすると消えてしまつて平氣になつた。

「此の齒が痛むんでせう?放つておくと大變なのだがまあよかつた、わしが直してやるから」ビンセットで軽く齒を叩きながら、薬賣りが言つた。

それから薬賣りは、數回綿を取り替へて彼の齒を掃除した。そして最後に例の薬の新しいのを、箱から取り出した。薬賣りの一舉一動と彼の顔とを、半ば好奇心に引かれて群集は凝視してゐる。

「齒の痛い時は斯うして綿に薬を泌めて、そいつを二三分齒に詰めておきあい、のだ。サ――見とれ」薬賣りは白豆程の綿をビンセットで挟んで乳白色の半流動体の液――薬壘の中に浸した。

彼は言はるゝ儘に口を大きく開いた。薬賣りは齒の

彼は首肯したので薬賣りは綿を取り去つた。彼は直ぐ舌の端でその齒に觸れた。刺激性を含んだ苦い薬の香が齒の中に残つてゐた。彼は直ぐうがひをした。どろろがひの水がさつと痛んでゐた齒に觸れた。その齒は又痛み出した。以前程ではなかつたが――。

「直つたらう」

薬賣りは彼の肩に手を掛けて尋ねた。彼は又痛み出したとも言へず、微な聲で「直つた」と答へた。すると薬賣りは群集に向つて

「皆さん!この子の齒の痛みが美事此の薬で直りました。それでもまだ信用の出来ないお方は、進んで試して見て下さい。目の痛み、肩の凝り、その他此の薬は何にでも利くのですから」

薬賣りは誇らし氣に叫んだ。群集の中には「成る程」と頷いた者もあつた。彼は「直らない!」と叫び返してやりたかつた。けれどもそれを言ふだけの力が無かつた。「サ歸りなさい。歸つたらお父さんやお母さんが吃驚するよ」

薬賣りは振り返つて優しく彼の肩を敲いた。彼は右手で懷の囊口を握り乍ら、囁くやうに「いくら?」と薬賣

りに言つた。

「ナーンだ薬代をか! そんなものは要らぬ。たゞで直してやつたんだ」

薬賣りは飽く迄誇らしげに大聲で怒鳴つたので、群集はどつと笑つた。彼の顔は眞ッ赤になつて、暫くは其處にゐんだ儘首垂れてゐた。

あゝその笑ひ!! それは彼の耳には何う聞えたであらう! 嘲笑! そうだ、嘲笑! しか彼の耳には響かなかつた。彼は僅か街頭の一薬賣りの生き看板にされた。否彼自身で生き看板になつたのだ。而も不正商人が麗々しく掲げる様な看板に。群集はそれを知らなかつたかも知れぬが。彼には矢張り嘲笑! しか聞かなかつた。

夏の湖上にて

山口 彌平

北の空に入道雲がニューと顔を出した。空にはちぎれ雲が綿を散した様に浮んで居る。風は少しもなく、夏の太陽はカン／＼と照り續ける。湖水は白金の漣を立て、如何にも静かだ。舟は葦の間をくぐつて、やう

やうの事で廣い水面に出た。カイカイツムリが二三羽カブと音を立て、沈んだ。其あとには五六重になつた波紋がダン／＼と大きく廣がつて、遂には何處となく消れてしまふ。良い天氣だ。舟遊びには持つて來いだ。舟は左右に揺れて、静かに進む。棹をさして舟の中を歩くと、ヌルリとして、もう少しで滑りこけさうだ。サラ／＼舟は微妙な音を立て、葦原を後に走り出す。舟のなごりは、渦を巻きつゝ道をつけて居る。小鮎が渦に巻かれてか飛上つた。同時に鱗がキラツと光る。遠くの伊吹山は半分雲を頂いて、悠々と聳れて居る。右方の靈山は薄墨色に、西江洲の山々は黄金色に輝いて丁度油繪を見る様だ。

Y君が聲高らかに歌ひ始めるとI君も又それにつれて僕も、三人の聲は強く弱く、鏡の如き湖面に、遠く近く果は何處となく消れて行く。僕は夢中になつて棹をさした。目ざす方向もなく、さすらひの航海を續ける遙か向ふにも一隻出て居る。貝取りの舟だらう。そこから聞えてくる舟歌は太く細く、湖上に傳はる何と云ふ長閑さであらう。手を止めて暫く夢見る心地になつて聞き惚れた。

太陽はキラ／＼と輝いて、水の泡も金銀様々の色に光つて見ゆる。

近くの安土城趾は青黒く、なだらかな丘を造つて水面に長い姿を寫して居る。「ピーッ」と絹裂く汽笛が一聲ひびいた。暫くして安土山トンネルより黒煙をはきつゝ、長い汽車は出て來た。緑こき田を滑るが如く走るが如く、山の裾野をねつて、終に姿を消してしまふ。姿が見えなくなつたと思ふと、シグナルはコトツと上る。後はゴー／＼の音ばかり。

我に返つて舟を漕ぎつづける。遠くの山、近くの山、死せるが如く、生けるが如く實にパノラマを見るより綺麗だ。I君は舟の先に横になつてまぶしさうな顔をして居眠をして居る。藻の中を通り過ぎて澄みわたつた所に來た。「泳がうか」とY君が元氣に言ふ。「ふーむ。僕は便りない返事をして漕ぎ續けた。Y君は僕の返事には一切かまはずシャツをぬいで、赤金の様な膚を太陽にさらし出した。「此處らで止らう。」と僕は獨言して棹を水底深く立て、縄でしばつた。「泳がんの?。」とY君にせき立てられて、僕はシャツをぬぎ捨てた。Y君は水底目がけてズボンと飛込んだ。バツと飛汁が立つ。ついで波紋もゆら／＼と。フワリと浮上つた。Y君は顔をなで、「泳がんの?。」と又問ふ。

「泳がうかな。」と云つたものゝ何だか心持が悪く、勇氣が出ない。I君も後から追立てる。僕は思ひ切つて飛込んだ。舟の上ではI君がこぼれ落さうな笑をたゝへながら、手を打つてはやして居る。水は案外冷たい。僕は漣を切つて泳ぎかけた。藻が足にからみついて自由がきかない。何となく心持が悪い。舟を目かけて抜手を切つた。やう／＼のことで舟にしがみ着く。唇がブル／＼と震つて体全体に寒いばが出來て居る。太陽は遠慮もなく照つて、脊中が焼ける様に暑い。僕は頭にかむつた手ぬぐひを取つて、脊中にひろげ太陽を負ふて舟端に腰を下した。I君は「色が黒くなるでなッ」と皮肉な言葉を出す。僕は太陽に向つて、手ぬぐひを捨て、腰をかけた。「これでも言ふの」と僕も負けずにやる。I君は笑を浮べながら何かに見入つて居る。其時、其格こう、如何にも得意さうである。

先頃の入道雲はどん／＼とおし寄せて來た。夕立が來ねば良いが。織山の頂上は雲間をもれる太陽の光でキラ／＼と輝いて居る。一しきり吹渡る微風は僕等の

頬をなで、岸の葦原をザーツと物凄く騒はがす。今まで美しく輝いて居た四方の景も薄黒く變つて、湖上は、さわ／＼と小波を立て、居る。遠くの會社の汽笛も物凄く音を立て、山の深い谷底へでも流れ落ちる様だ、煙も渦を巻いて西南の方に消れて行く、夕立の前らしい。「歸らうか。」と云ふ僕の言葉に皆も賛成だ。漕ぎかけた。舟は木の葉の如く南へ南へとおし流される。何處からともなく雷の低い音がする。早やカイカイツムリの聲すら聞けなくなつた。

訣別 高橋治郎

想起すれば二星霜の昔あのならしい故郷を後に音に名高き琵琶湖畔に起つて果しなき水郷の自然美に親しむ身とはなつたのだ。「神戸、明石方面行！——」驛員の發車時報のかん高い聲が構内の隅々に迄響いた。人々は永い夜の眠りから覺めた時の様に活氣づいて右往左往頻りに歩き廻つてゐる。手荷物係へ行李を肩に走る赤帽の姿、醜い生存の競争はこゝにも又現實に表現されてゐる。

だ、だのに自分は今未練にもこんな感情に捕はれて、若いハートを熱してゐるではないか！「人間到る處青山あり」奮勵せよ、起て！——」こんなつまらない事に心を痛めてゐる時最後の發車相圖の鈴はけた、ましく鳴り響いた、ヂリン／＼／＼……と。

短い、そして力強い訣別の詞がすむと又後は重い／＼沈黙が続く。突然鳴る汽笛を名残りに、靜かに／＼滑り出した。「サヨナラ／＼お丈夫でお手紙を……」お互に帽子を振りつゝ交す言葉おゝ父上、兄上、そして住みなれし我が都よ故郷よ！さらば、あゝ涙は二重三重そしてやがて頬を潤した。共に奮闘を促す様な二人の顔、噫今も尙躍如として目前に迫つてくる様だ。

汽笛の音は永く／＼世界の果迄鳴り渡つて行つた。遠く微かに。(完)

起てよ彦中六百の健兒！

高橋治郎

湖邊の春にかざられて

文苑

發車時刻も五分の後に迫る。今か／＼と待つ其中も心臓の鼓動は或は高く或は低く、速く、波立ちて止まなう。東海道線下り列車は今滑る様にブラットホームに煤煙をはきながら入つて來た。改札口から掃出される様になだれ出る客にもまれて、漸くブラットホームに立つた呼び歩く賣子の聲は喧囂たる足音をよそに、商賣大事と調子面白く賣り廻つてゐる。

窓に寄りそうて愉快氣に眺め居る青年、四方山の話に笑い興じてゐる年寄今日の遊覽地を、明日の見物をあれか、これかと想いめぐらして居るうな、若いブル夫婦、之等樂天地に遊ぶ人達で鈴なりに、詰つてゐるのだらう。此の列車は！ごの青年の面を視ても、ごの紳士を見て、將た半天着のブロー連を見ても、今現在、自分の感じてゐる湧きかゝる様な、悲しい訣別の感を胸にしてゐる者は恐らく無からう。

會者常離！そうだ、自然の原理である。けれども其處に人間固有、人間特徴の執着心は湧いてくるものだ。然し餘りにそれは男子たる者としては未練がましい事

雲吹き拂ふ伊吹山

ふもとの……

シト／＼と春雨煙る四月の空氣を破つて何處からともなく、懐しの彦中校歌が流れて來る如く我が書窓に聞ゆる吾が書窓に。

おゝ彦中！青春の血張る六百の健兒によつて護られつゝ、ある此のいご歴史古き彦根中學校。それは金龜城下に聳ね立つ吾等が學びの庭であるのだ。目指す成功の彼岸に到達せんものと、其の道程の第二步に足をふみ入れんが爲去ぐる大正十三年、彦中の門を潜る身とはなつたが。現在の彦中や如何に、靜かに冥想するに餘りに聲譽の上らざるに慨嘆せざるを得ない。意氣の上にも、品性の上にも總てが意氣消沈の體たらく餘りに過去の歴史のみにとらわれ過ぎては居ないのだらうか。むしろ誇るのを第二として此の古き歴史を押し立て、層一層校風改革に盡力し、歴史ある我が校の光輝を上げなくてはならない。それが當然の吾々の義務だらう、自分の席を置く學びの家なんだもの。

私は想ふ「彦中は眠つてゐる」と、眠れる獅子！そうだ一度起てば天下に號令する様な意氣が何處かにひそん

であるのだ。

他日成功の覇を握らんとする吾等學徒、其の道程の第二歩たる現在を最も堅實に着實に蹈んで行かなくてはならない。周囲の掃除もしなくてはならない、周囲の掃除即ち學びの庭の掃除を！……

犬の遠吠に長い冥想の旅路が破られてしまつた。何時の間にか校歌も消せてただ相變らず、大地に引込む様な春雨が靜かに／＼降り注いで居た。(完)

我輩は蟬なり

那須 凌岳

我輩は夏の眞最中、土中からやつと這ひ出して、蛇の災を脱れて木に這ひ登り、太陽の恵みに遇ふて殻を脱け出し二日目頃から今を盛りと時を得て我等特異の奇聲を發す藝術が今更ら身の仇とならうとは、思はなかつた。人間は勝手な奴で「ああもう蟬が鳴き出した夏らしいなつた。」等言ふ。我輩は朝つばら寢坊が未だ夢心地の間から一心不亂に唱歌の練習を始めるのだ。薄命の一生を最も意義深く、其の日其の日を楽しく獨特の美聲を張り上げて、身の誇りとして居るが茲に唯一つの痛ましい不幸は、惡戯小僧に捕る事だ。いやそ

「さあ大變」と我輩有らん限り、もがき、苦しまぎれに「じいじい……。」とはげしく叫んだ。捕はれの身の不運。残念さ。

齒切りをかねて口惜んで居る最中、何物か我輩を救ひ上げて呉れたと思ふ瞬間「すはこそ大敵」烏の奴の嘴に掛つて了つたのだ。嗚呼萬事休す、我輩地上に這ひ出して四方敵ばかりの生涯僅か三日の命だ。 終り

清潔検査

飯村 天祐

目を覺ました。

「今日は清潔検査だ」

僕は思はずつぶやいた。

昨日の筈だつたが、今日のびたのだ。

それにしても一昨日迄葉刈屋さんが来て居られた。

其の刈つてゐたゞいた葉が後にも前にも一杯だ。

僕は弟達と母の監督を請うて、整理に一生懸命になつた。それにお天氣がよいので箒を、持つてはく度に砂

ぼこりが煙の様に立つ。

汗が出る、ほこりは立つ手や顔はほこりだらけ。

僕は弟にこんな手になつたと手を見せると弟は僕の手

れだけなら未だ機敏に逃げたら、其の難を脱れることも出来るし我慢も仕安いが夜は蝸。晝は烏の大敵と、きては最早や絶對絶命助からぬ。

折しも八月二十一日の眞晝中だ。太陽は、かんかん頭上に照りつけ、あの勝手な人間の奴は勿論、森羅万象皆萎れて頭を下げ恰も我輩に降服してゐる様で、獨舞臺の天下だ。我輩時は今ぞとばかり、元氣百倍、意氣揚々と二足三足もちもちと高く這ひ上り腹一ぱい息を吸ひ込んで全身に力を入れ勇を鼓して上に向ひ「じいじい……」と歌ひ初めて得意絶頂、……。

「おい靜かにせい、あすこだ。」と。村の惡戯小僧二人我輩めがけで手に手に大きな長い竿を持つて忍び足でやつて来る。「又來たな桑原々々」と忽ち聲を呑んで目をつむつて居ると突然棹袋が「にゅつ」と下から來た。我輩「ははは……。」と心の中で笑ひ「はつと」體をかわして序に「小便をひつかけて巧に逃げ出した。」「一難去つて一難來る。」木から去つたと思ふ間さになく我輩身の自由を失つて只「ばたばた……」「あしまつた蜘蛛の巢だ。」と思ふと同時に一生懸命もがいた。

蜘蛛の奴、目を光らし齒をむいて此方に突進して來る

を打つて逃げた、後でお母さんに叱かれてゐた。屋外の掃除はこれ位にしておいた。

内の中の整理に取りか、つた。先づ蒲團からである。

僕が持つてゐる弟が屋根の上から取る。

美事に屋根で蒲團のひなたぼつこ。

蚤君おこまりの段お察し申す。

たゝみの上をはくどすぐ持ち出す。

障子をはらふ、ゆかをふく、中々いそがしい。

持ち出した、たゝみを外に二枚合せて立てる。

それがすむどしきをふくのである。

たんすをのけると後から雑誌が出る物さしが出る。

まるで魔法使のおばあさんの魔法杖の様にのける度に出て來る。

其の時ふと

「今日は！」

誰だらうと思ふて臺所に來ると意外／＼検査官だ。

「ごころう様」

検査官は出てゐた。

そうしてたゝみを入れようと思ふて外に出ると白い美しい紙片に

「秋期清潔検査済」

の文字が書いて貼つてあつた

僕は思はず「おっ？」とさげんだ。

其の時弟がお晝だからと呼び出したので御飯にした。

た、み入れは午後にした。終り

首夏

末松 修

清らかな空氣の漂つて居る明方、土手に歩をうつした霞まだ明け切らぬ明方の薄やみにつ、まれた町では雞の聲が一聲、又一聲と聞ゆる。土手の向ふの麥畑の空からはひばりの囀りがきこえて来る。つい下の畑ではつい今し方來た二人の娘が手ぬぐひを姉さんかぶりにして草取にいそぐ。青々とした雜草をふみしだいて小高い所に出た。四方を見渡すと、今迄眠つてゐる様に思はれた山々が頂から次第／＼にあかるく青白い山肌を川の上手にあらはした。

町の家々からは朝飯たく煙が上りはじめ。蛙の聲ひばりの鳴聲青々とした樹木、どこなく夏の氣分が漂つて居る。

海邊

大森 祐次

夢のやうに船唄が聞えてくる。すう／＼とどこまでも打擴けた海は濃い藍色に澄んで午後の日光にきら／＼光つてゐる。はるかの水平線には鷗のやうな白帆が繪のやうに並んで、西の空には富士の峯がきつとそびえてゐる。

實に、景色だ!!すう／＼と沖の果には怪物のやうな雲がちつと群れて動かない。見れば見る程奇怪な雲だ、もしか中に何物かひそんでゐるのではなからうか?僕はふとこんな無邪氣な考へを起してそつと首にかけた望遠鏡を取つて見た。白い海鳥がサラ／＼と音を立て、水面ひく／＼飛んでゆく。僕は四方の景色に見られてしばらく餘念なかつた。

夕の橋上

大森 祐次

終日熱氣を吸ひ込んで疲れ切つた人家や、草や木や花は静かな夜となつてはつと息ついた。晝間の汗ばんだ身體の汚を流水に流し、洗濯した浴衣に着かへて夕飯の膳に向つた時、言ひ難い豊かな清々しい氣分に包ま

れるのである。夜の讀書に耽ける前ぶら／＼と京橋の上に来ることが夏の夜の僕の最も嬉しい一つの仕事である。今宵も僕は涼味を追ふて吸はれるやうに橋上に來た。

冷たい川風が頬を撫でて行く毎に、臟腑にまで滲み入つて晝間の熱氣が次第／＼に冷めて行くのをおぼゆる僕は橋上を往きつ戻りつ歩いた。

欄干によりかゝつて通行する人を見て居るもの、聲を聞いて暗の河原を覗いてゐる人、荻蘆をしいて寝ころんでゐる人達のかるやかなはなし聲がきこえてくる。

布引の瀧

岡庭 博

午後一時頃家を出て大倉山から、電車に乗つた。餘程行つて、布引で下車すると、すぐそばに生田川が、流れて居た。瀧は此の上流にある。川の水は殆ど無く、子供が二三人、バケツを持つて遊んで居た。

川にそつて上つて行くと橋があつた。それを渡つて行く内に段々と、坂になつた。約四五丁も來た頃、「之より、雌瀧一丁雄瀧二丁」、等の建札があつた。先づ雌瀧へ行く。其樹木のしげつた中に、瀧つぽの水は青

々として、瀧のしぶきは飛んできりの如く、今までの暑さは、一時に忘れられたやふである。それより建札まで引返し、雄瀧へ向ふ。坂が急な爲か、遠い爲か、人は少かつた。瀧は流石に見事であつた。歸途に着くと忘れられた暑さが、一時にもどつて來た。

雨の道を

木村 三雄

どう／＼傘をさして家を出た。道には所々ぬかるみが有つて歩きにくい。向ふの方は飴の様に／＼車輪のあとが淡くのこつて居る。ふと見るともうかなり歩いたらしい。町まで來て居た。どこかの家の「トユ」から盛んに水が落ちる音がごこん、ごん、と微かに雨中に傳つて聞えて来る。馬がおとなしく主人の歸りを待つて居る。

時々思ひ出した様に前がきをしたり「くつは」をかんだりして居る。そして白い息を「ホーホ」と出して居る。角の商店の丁稚が算盤をはぢきながら。時々しど／＼降る雨を嫌さうに見て居る「ガス」が「ジージ」ど濕っぽい音を立てながら青い光を暗い店内に投げて居る。田舎娘が白い足袋を一面によごしてそれでもかまはず

こくく歩いて行く。

ふと目をそらすと同窓で學んだ、M君今日は大工になつて威勢よく板を削つて居るかな。肩が面白い程飛散る、M君はチラとこちらを見た、そして笑つた。さびしみの目で

僕は又歩き出した小屋根にかけた仁丹の看板が一人さびしさうになだれて居る。工場の煙突から煙がむくむく出て雨中をさまよつて居る。

用を達して来た私は歸りは田道から歸つた。道の草々には露の玉が光つて時々音もなくころころと轉がる。一歩一歩毎に蛙がぼかんと飛込んで「すーすー」と泳いで行く。

向ふの山のふもとが見えず驛もぼんやり見ゆる。ビー汽車が發したのであらう笛がなつた。向ふの家には水車がぐるぐる廻つて居てそばには櫻が春雨に煙つて一ひろくはころびはじめた。もう晝も近いのであらう工場の汽笛が鳴り出した!! (完)



した。露の玉は朝日に光つてなんともいへない美しさだ。

朝日は静かに昇つてゆく。

何處からか朝の静けさを破つて鐘の音が氣持よく響いて来る。小鳥が二三羽朝日の光を浴びて氣持よさうに鳴きながら飛んで行く。

鶏の威勢のよい時を告げる聲が聞えて来る。

朝の澄んだ景色を見ながら土手へ登つた。

そこで僕は霞の中にコロンブスが新天地を望むかの様に高く手を上げ朝の澄んだ空氣を吸ふて眞赤な太陽の昇るのを見詰めた。(大郷村字新居にて)

丹羽先生を送り鈴木先生を

迎へてこゝに私は思ふ

高祖 保

多年、私たちを教導された丹羽先生とお別れしてより約半年近くにもなりました。けふ今日、鈴木先生をばお迎へ申したことを、私達は心ふかく喜ぶのであります。十四年春四月——新學期、當先生と始めて圖畫室に於てお目にかゝり、先生のただ熱誠こもつた御言

田舎の朝

夏川 孝太郎

東の空が紫ばんで遠くの綿雲が紅色に染まる頃、鶏の聲が朝の涼風と共に一しきり聞えた。

涼風の過ぎた後は唯「なんば」の青葉がゆれることもなく静かに微かな音をたて、をるのみだ。静かな農家はまだ眠に就いて居るのか煙一條上らない。

空は綿雲の動くにつれて紅増し、静かにコバルト色をして眠つてゐた山の峯は眞赤に輝いて活々としてゐるやがて輝かしい朝日は静かに出て線となり、眉毛となり輝々と輝く黄金の征矢を投げ出して雄大な姿を山峯に現した。その様實に壯快だ。

小川の水はさらさらと音氣持よく朝日に照らされて金波を輝かせて流れ、川底には「めかだ」の鱗が黄金に光つて居る。遙か川下には朝霞の間から微かに水車のゆるゆる廻るのが見える。岸の樺の木が川に影を寫し明るい朝日の光がその間からさして居る。

小川づたひに田道を歩くと青疊を敷きつめた様な青田には涼風が軽く稲の葉をかすめて吹き行く。葉は波立つ。一足ふむと道端の月見草はさつと音立て、露を落

葉に接したとき、私たちは一途に何とも云ひ得ぬ感激を覺えたのであります。

ひと日暮れ、ふた日過ぎ、三日を送り、遂に長い暑中休暇を経て、新しき百舌鳥の聲も未だ聞き得ぬけふ初秋の日、書齋に在つて此の稿を綴りつゝ、私は獨り休暇前なる一學期の四箇月を省りみ、ふかく先生の誠あるお姿を想ひ起して感激に浸つてをりました。先生の御唇頭を銜いて進る敬虔にして生氣潑瀾たるお言葉に對しまして、この私たちがごんなに內的に爽快を叫んだ事でしたか。——如何にも小さく如何にも軽い私たちに、こうまで敬虔な態度と斯くも生動躍々として熱誠きはまる御口述とを以て對せられた印象を、一日ふかく脳裡へ收めたのでした。

肌なつかしい初秋の陽光のなかを、長らく聞けなかつた近傍の吾が母校より、亦新しい伊唔の聲を耳にしつゝ、筆を重ねて行くことを、私は限りなく嬉しく感じてをります。小學生徒の先生に對する親密さを見るごく、また私たちと先生の間もいま師弟として一入親密であれど心より願つてをります。そして流れ箭の如く行き去る年月の中を親しく先生に御指導を仰ぐのは

どんなにか喜ばしいものであらうと獨り考へてをりま
す。

「冬」と云ふより「春」、「秋」と云ふより「夏」——そのご
とく、先生の温情ゆたかなる御教導を願ふと共に、敬
度にして熱ある御言葉に接することゝ、また願つて居
るのであります。

「情操はゆたかに、詩想はおだやかに——」この語を
以て先生の詩的人格を視ふに、未だ私は餘蘊ある語片
だと考へます。私は、默なるうちにも力強く溢れいづ
る先生の多情多恨な御人格の一面と、將た生氣満々の
お言葉のなかより、私たち生徒をして、より獨創へよ
り新鮮へ、そしてまたより藝術味ふかい世界へお導き
下さる先生の唯ならぬお心を感謝する次第であります
さらはれない自由世界、ふくよかな美しさ、それをし
て私たちの心に味ふことは人生一部の限りない大なる
歡喜であると思ひます。人情自然より滾々と湧く美し
い智識の流れを掬ひ、且つ美はしい心を養ひ、夢また
多い若年の幾日を送るのは、『美術、文藝』方面に俟つ
て其の功なほ大なるものでないかと考へるのでありま
す。——智識のみ。豪勇のみ。——それに走らずかたよ

らず、自然の人心よりして自然に興る「美」を心裡へよ
り以上に備へ養ふべきに、美術は餘りにも好いもので
はありますまいか。敢てこれ以上の多言を要しないと思
ひます。

云へば長びき、長びけば亦限りない自分の口さがな
いことをいま、是に謝しますと共に、私たちと以後親
しく御指導下さるべき鈴木先生の力づよい御人格に接
する日の多かれど祈ります。

紀行

大正十
四乙丑 橋立紀行

白鳴子 佐竹貞一



めきたり。

鳴る汽車のなりのみ春の眞闇捨
小驛過ぐる春闇の燈の走るなり

夜半の汽車いぬる人多きが中に交りて片腰
かけつ。よくねいらねど顔のひかりや、艶

春明方の空霞めるや、悠なる陽光九門ひらき心ゆく限
り天放る。古京既に來り繞る山々未だ淡碧相交り甍漸
く浮き沈みます。

なつかしや京の早夏の朝寝小燈

山小京の夜明のうす若葉

汽笛きこゆ春京のごこ消れてゆく

花園や紫金に匂ふ青葉森

保津川流れに流る。なごか依違ふべき。止むことの無
き歩み淀むことなき淀み、岸をけづりて過ぎ淵を盈て
ゝ去る。何の愛惜離苦やある。唯凡々に自らを行る。
堰にはせがれ延びには延び、躍れば花と散り走れば瀬
をなす。溶々たる哉小鮎鯉鮎澗として息ふべし。

皇月咲いて保津の流れの朝びらき

水ひた、岩ひた、保津も夏靜に

吹き下せま保津嵐が糸見水

保津の船上す小綱の夏日切る

魚竿さす岩固し保津も夏近し

名峽既に過ぐれば田圃なり。變りなき人の生業ひ思ひ
出されて半すゝまぬ情ぞする。則ち能く見やれば野麥
なり、花なり、草なり、畦なり、桑の畑なり、近くに

は家居す。懐しみ頃に出来て心大玄に憬る。

麥の穂よし芒の程よく日ざすなり

雲雀鳴かず然と汽車のなる野良走り

綾部見ゆ屋並の光る夏近し

河原さらさら水ささささしり居る

橋を横に見する綾部の娘繪日傘

桑の葉の萌の渥ふ緑日彩

夏近し北へ行く人と南まばゆく

舞鶴は思ひしに似ぬ寒郷なり。歩行く中にも草のには
ひ宜しく、相遇ふ鄙夫美し女も親しくやら、我を見る
道を問ふも嬉しく、天氣讀むるも心安し。雲雀また聞
ゆ。鶏居れどもなかず、軒下に藁ちらけたる家なり。
手洗の廁あたりの草生ひて伸びたるあり。よきことし
たる草なりけり。

小丘のり越ね中舞鶴要港部につく。

早夏焦ぐる煙を吐づく艦小黑

鐵憂々耳を板うつ眩し夏

船渠のぞく目眩んでのぞく夏日の威

漸くにして立ち去り宮津に汽車走る。日既に西山に春
く。與謝の海幽に天橋松の離立只箸渡せる見戲あり。

晴輝樓に泊る。樓上展望自由にして橋立の暮色あくなし。

與謝暮るゝ松くるゝやよ暮れの春

與謝暮れて幽かに一つ文珠の燈

かます食ふや侍り女やさし小夏の夜

早夜闇夜與謝清げ夏の闇みくらみ

風なければ枕静に眠る。一睡の醒めいと心地よや。枕歌て、五時を聞く。乃ち盤坐して褥上沖を見放つ。

いよいよ明くる東雲の空うす朧にて翠巒紫水鏡をなす

鷗一羽こちらへ與謝の春鏡

黒ずんで夜明けを夏の海光る

與謝の海外へつゞける夏海明け

宮津を後にして輪船天橋を指す。左を右へ並木立凡そ三十餘町とかや。文字に長くして目に短か、り。船を出で、成相山札所に向ふ。

うるめ干す夏晴肥わし十九の娘

振りかへりかへりみ春の壽命松

股のぞき橋立かすむ眼据底

大江山鬼すむや尾の上夏黒む

若葉青葉谷放るなり成相寺

成相寺何拜みけむうつむきぬ

古堂寂とし山氣濃かに、林間の薰風知らず汗を滅る。

本尊御影寶物摺繪はがき皆求めぬ。靈境人稀にして人また繹く。すなはち予れ杖を昇いて山を下る。

お仁王よ往きどかへりも夏近し

股のぞく腰かけて見る夏の風

橋立の海静か松遙か夏微か

夏夜よし縞の宮津のから財布

大正十四、五、二六追稿

旅行記

第五學年修學旅行記(第一日) 藤田邦一

東京旅行へ！、東京旅行へ！、それは現在の私の憧憬の焦點であり、又私の希望の象徵化されたものである我々が一樣に、一週間も前から、夢否現と憬れの、東路の旅を、試みる事が出来るのだ。

五月十二日午後七時、其時は遂に來た。

午後七時三十分、發車の笛聲と共に、黄昏時の彦根の町を後にした。夕闇の中に電燈の光が、きらきらと輝いて、朝な夕なに仰ぐ金龜城は次第に幻の様に

薄らいで行く、ひし／＼と身にせまる様な憂愁の感に満たされる。東へ／＼と汽車はひた走りに走る。

客は皆睡魔に魅せられたかの様に夢の國にさまよつてゐる。ただ我が彦中健兒は元氣に思ひ／＼の遊びに餘念がない。早や汽車は岐阜を過ぎて黒白も判明せぬ眞暗闇と無心に走つてゐる。中京も夢の間に！

汽車は半圓形の鐵橋を走つて今濱名湖を渡つてゐる。はるかにおぼろに霞んだ月に照らされて湖面は金波銀波とすすかにさざめく。夜の闇の中に幻の様に湖東の地は浮いて見える。幻想の中の地の様に！

もう眞夜中だ。

皆は今まで元氣は何處へやら一樣に眠つたらしい。

古の難所と云はれた東海道の大井川も轟々たる響と共にまたたく内に過ぎて行く。

やがて太陽が東天に微笑をもらす時附近の地には曉の鐘が乱打されてあたりは薄ぼんやりと明るくなつて光と暗とが争つてゐる様である。

残月彼方の山の端にかかり糸の如くなる炊煙後にたなびき朝の清爽な氣が頬をかすめる。

時あたかも春盆の如き白き雪をいただく芙蓉の峰が東

天に姿を現す。崇高な感じを與へる曉の富士は今我等の眼前に迫つてきた。朝は太陽の昇ると共に全く明けて今日は又なき旅行日和。一同は有頂天になつてしまつた。兎角する内に汽車は靜かに國府津驛に入つた。

時に午前五時四十七分。時間があるので國府津の町に足を運ぶ。あまり見る所もなさうな町を出て海濱に出る。上つて間もないらしい軟らかな日光を靜かに受けて細かい眞砂が光つてゐる。

乙女の胸に高鳴る鼓動の様な小波がささやく様にビシヤリ／＼と軽く渚とたわむれ豆相の連山はぼ／＼と朝な夕の彼方にかすんでゐる。

一同は朝の食事をとる。六時國府津より小田原行の汽車に乗る。十五分位にしてやがて小田原着、それより箱根湯本までの電車に乗換ふ。此處にて彦中先輩川島氏の御出迎を受く。静岡邊より見る家／＼がほとんどバラックで巖丈な又永久的な家はない。それは一昨年の震災のためらしい。追憶して自然の力の偉大さに心ひそかに驚く。美しい色ざりのバラックが木々の間に隠見する。太閤の昔の逸事もしたはれる小田原城を右に見蘆の湖より流れ下る早川の清流を左にふりかへり

ながら電車はけはしい山道を上つてやうやく湯本に着く。底倉行の電車に乗換ふ。

仰ぎ見れば峨々たる山々天を突かんばかりにそそりたち、俯して眺むれば千仞の幽谷極まる所をしらす。

紺碧の溪流散りては花かと思はれ砕けては珠かと疑はれる。狂奔馳逐し萬顆の泡珠は長空に晴雪をこぼす。

嗚呼絶景！奇景！偉景！筆紙の叙べ盡す所ではない。山輝水映の景色はうららかな陽光に一人の趣を副へて我々はうつとどしてしまつた。

やうやくにして底倉のつたや旅館に到着。一同荷物を託して案内人につれられて蘆之湖へと歩を運ぶ。

けわしい山又山の難路をよじやうやく蘆の湯温泉に出る。我々一同は昨夜の睡眠不足に疲労を覺ゆること甚しい。幾多の近路を通る。自動車が砂塵を残しながら上下する。真にうらやましい。

曾我兄弟の墓や満仲の墓を路傍にながめ上二子下二子の翠緑したたるばかりの二連山をながめながら我々は元箱根に出る。川島氏の歡待を受く。

一同此處にて晝食をとる。休憩後箱根權現へと向ふ。古木鬱蒼たる幽邃の地にして神々しさがひし／＼と身

移るのも忘れてしばし茫然としてゐるとはやボートは湖尻に着す。

いよ／＼大湧谷へ行くのだ。山間を跋躡す。

姥子温泉を過ぎていよ／＼大湧谷に出づ。全山草木やけて恐ろしい感じを與ふ。何だか變な臭が我々の鼻をつく。我々の眼前には一大慘ぎやくな悲惨な場面が展開された。いよ／＼やつてきたのだ。我々の血は湧き肉おどる。一樣に叫聲をあげずにはをられなかつた。

小さな凹みには土色の熱湯をぶつ／＼と沸騰させてゐる。此處彼處には盛に硫化水素水蒸氣亞硫酸瓦斯其他の混合氣體を噴出してゐる。

地獄もかくやと思はれる。

何と云ふ壯觀！何と云ふ凄絶な光景だらう。

そのそばに一軒の茶屋がある。

今もし噴火したら？ そんなことを考へては身ふるひがして一寸の間もこんな所にゐられなくなつた。

我々は其處から一步踏みはづせば千仞の谷底にころげおちる様な所を恐怖の念に心を満たされながら下る。途中所々硫黄華がたくさん岩石に附着してゐる。

谷の流は水蒸氣を立てながら流れる

にせまる。參詣を終へて後ひきかへして關所跡へと向ふ。底の底まですき通る様な深緑の蘆の湖の清たん眞白き倒富士を湖面に映しはるか彼方には堂が島の離宮綠樹の中に隠見し。我等をして仙境に入らしめ徘徊去ることが出来ない。

箱根の外輪山内輪山の速峯をながめながら歩を移す。沿道は一帶の杉並木箱根街道跡に行く。

昔の有様が髣髴として胸裡に浮びつ消えつする。

一草一木の微と雖もなを千糸萬縷の情濃にして世の桑滄幾度か變轉し古き歴史を物語つてゐる様である。

關所跡や色々の史跡を見る。

元本陣とか云ふ家にて古い色々の書物を見せてもらふ大いに參考になる所あり。

それより蘆の湖を縦断せんとしてモーターボートに乗り移る。なだらかな傾斜が東に面してすぐ近くの波打際まで續いてゐる。白浪をけだてて進むモーターボートのエンジンの音は我々海國民族の若き血潮を湧き立たせながら勇壯なシーマンの生活を思ひ起させる。ボートは寄せて捲きて碎けて散る黄金の波白金の波眞珠の波を分けながらすすべる様に湖面を走る。涼風に時の

硫化水素の惡臭に惱まされながら迂り易い砂の道を下ること二十二町。銀時計の黒變を恐れながら。

やうやく上強羅に達す。此處は一つの遊園地らしい。

それよりケーブルカー電車に乗るものあり。

元氣にも徒歩するものあり。重い足をひきづつてやつと底倉の宿屋に到着したのはたそがれの頃。

早速湯に飛び込み疲労を醫して夕餉の膳に舌鼓を打つた。

夜のそばりがすつかりあたりを包むと共に靜かに／＼夜の温泉町は更けて行く。(終り)

× × × 辻 善七

六月十五日箱根——東京、

天下の險に於ける靜寂な一夜は明けた。我等一同は前日來の疲勞は、全く醫し得たものゝ如く午前四時早くも躍起した。薄明は全山を蔽て美しく色ざり杳冥の遙か彼方には一片の紫雲あるかなきかに漂ふて恰ら青帝の駕し給へる玉輦かと疑はれる。程もなく東方旭日昇天して我等を射活動の世界となつた。

我等は濶濶として蘇つた元氣を以て宮の下驛に集合す

五時五十六分電車は静々と下り初め早川の溪流に出ると、河中孤影悄然たる岩石清流を激して白玉を散らし相乱れて青潭に落ち實に美しい景色である

藤澤で乗換片瀬驛下車

種々の名物を飾った店軒を連ねて平列してゐる間を進んで行くに濶然として開け洋々たる大海の岸邊に出たこの日海はすこし波があつたがぼんやりしたうす曇りで江の島は遙か彼方に巍然として浮いて見ゆる。

蜿蜒たる架橋に肝を冷しつゝ、第一步を歩み入れんものをと急ぐ。江之島神社に参拜し勝景を美てながら島を一週し洞即ち龍窟を見に行く。道の兩側に茶屋店輔がすらと並んでゐて各家は同じ様に姉さんやお婆さんを備へてゐる。「おはいり遊ばしてお土産御覽遊せ」

名物の壺焼あがつていらつしやい」等

早口な臺詞でお客を呼んでゐる。

海水は洞の入口にまで来てゐて非常に美しい

假橋で眞暗な中へ這入つたが一更つまらぬものである這入ればはいる程洞は小さくなり上部には鉄力で蔽ふてゐて雫のかゝらない様にしてある。

入ること數十歩で洞は二道となり各々又二十歩許で極

はまつてゐる其の極めた處に一字があり之を天女廟と云ふ側に石佛數軀を安置し洞内泉滴つて暑さを忘る。既に出て遠くを望むと數百の漁船波濤の間に隠見し手近き處には侵蝕を逞うしたる大小の岩石蟠居するを見る。

我等は此の絶景を見飽かずとも時間に制限あるからよぎなく此處を去つた但し此處の海岸にて我等は江の島を背景として記念撮影を行つた

片瀬驛上車新田義貞投劍の處をながめ黄砂青松遠く連なる七里ヶ濱の磯づたいに鎌倉に着す。

松の大樹ある大道を行くと鶴岡八幡宮である高い石段の左側に所謂公曉の隠れたる數種の大銀杏高く虚空に聳ゆ。梢を掠める風の音はありし昔を語るものの様である。かく聯想しつゝ八幡宮に参拜白旗神社にも参拜した。行くこと數町此處に鎌倉宮鎮座まします

社殿壯麗でないけれ共千年の老樹枝を交へ綠翠鮮かである。我等は跪いて冥々にまします護良親皇をしみじみと拜した。社殿の後方に親皇九ヶ月在せし岩屋があり高さ丈餘廣さ九疊敷位である

身世の變忽にあつてかく大なるのであらうか幾春の花

の第一歩だ一同清光館に落ついた。

内藤 信夫

十五日 (第四日) 東京

旅寝の一夜を過せし清光館に樂しの夢を破つて、今日は嬉しい帝都の見物だ。午前五時と云ふに最早今日の天候を案する人、まだ〱夜中づつて白河夜船の連中等色々である。

午前七時宿を出て、今宵の宿、(錦町三丁目静修館)を示されて、イヨ〱東京見物の第一歩を踏出した。どうもお天氣が氣遣はれる。さて第一番に二重橋に向つた。其道々中央氣象臺文部省(ブラック)等を眺めつゝ一行は縁深きお濠の縁を廻つて、ズン〱進んだ。お濠の中には昔ながらの角矢倉が高く緑樹にぬきんで、天を突き、自然と嚴肅の感が起る。震災後壁の甚しく破損して、未だ修理すらされてゐないのも大變恐懼に堪へぬ次第である。二重橋のたもとに整列した頃に、ポツリと見舞ひ始めた雨は我等に對してはあまりに無頓着であるかの様である。やがて九重の雲深く在す兩陛下の萬歳を祝福し奉り、しばらくは默想の中に佇ん

だ。雨は益々降つて来る。大廣場の端は茫然と雨中にあつてかすんでゐる。大楠公は永に皇室を御守りすべく、馬上に意氣揚々と其威勢を示し、見るからに肉を躍らしめる様な感じがする。

櫻田門に出れば彼の一身を犠牲にして、國家の爲に斃れたる開國の元勳大老井伊直弼公をしのび、自ら襟を正した。噫！余は思ふ

「大楠公をして武士道の範たらしめば、直弼公をして政治道の神たらしむべし」と。

貴族院衆議院の見學に向つたのであるが國家の議事堂としては案外貧弱だつた。守衛について議場に入り丁寧な説明で議員席新聞記者席外國使官席其他の様子も大畧分つた。

日比谷公園を表通りにして、公園前で青山行の電車に乗込む。明治神宮に向ふのである。神宮前で下車して數町上つたり下つたりする神宮道、それは恰も海濱砂原の如くで吾等は歩毎にガサツ／＼と云ふ足音を耳にしながに進んだ。やがて大鳥居も過ぎて一歩々々と神嚴さを感じて首自ら垂れる。先帝の御靈廟に佇んだ時余等は我を忘れて餘念も無く唯々御聖德の大なるを

忍びつつ禮拜し奉つた。雨中の神宮は如何にも物靜かである。神々しく繁茂してゐる樹木も殆んど動かない。大空は灰汁を搔交せた様な色をして、低く垂るるが如き新緑の樹木に接して居る。一行は寶物殿拜觀を了へて新宿園に急いだ。

此處で愛知郡出身の衆議院議員堤康次郎氏の響應に預つた。先に箱根でお世話になつた川島氏が又此處でも優待して下さつた。一同は喜の色を面に表し、先輩諸氏の御厚意を深く感謝しながら、園内の活動寫眞歌劇其他の娛樂に時を移した。

午後六時歸館のはずで自由に解散することになり、此の時各組級長は一行を代表して井伊家訪門の途についた時に一時。吾等はこれから始めて江戸の見物で全く目が廻ふ。ヒョト／＼となつて歸館する頃は街道の電光強く眼を射て全く夜の都に化した。門限十一時と云ふ聲を耳にして、又出て淺草に詣る。肆軒を連ねて賑ひ難路してゐるのに、思はず赤毛布ぶりを露出してゐたろう。肆の盡きた所に山門がある。矢張り觀音様は人を救ふべく残られた。山門を這入ると全く趣が異ふ。薄暗い人の影も見ね様な、しんみりした中

ずん／＼進む。

赤羽、大宮、久木などの可成の驛も過ぎて汽車は栗橋驛から長い鐵橋にかゝつた。

「利根川だね」

「大きいね！」

なご云ふ聲が起る。鐵橋の半に來ると、上流のやや右に偏つて、かなり大きな山が見える。天氣が良くて濃淡の工合が如何にも見事である。襪毎に光線が輝いて繪の様に見える。

小山では汽車は右と左とに分れて行つてゐる。「水戸方面のお方は乗替」「兩毛線行のお方は乗替」である。

宇都宮から汽車は後戻をして、そして西に進んで行く。忽ち高原性の颯爽とした空氣が車窓を壓して迫つて來る。始めて胸が開いて呼吸がつげる様な爽さを感じる。鶴田の驛附近に中學校の廣い校庭がある。野球をやつて居る。それからして何となく良い心持がする。日光街道の杉並木が線路の左に右に限れる。

「立派な杉だね！」

「あれを金にしたら大したもんだらう」と誰かと言ふ谷が谷に連つて深くゑぐられて居る様な所もくろりと

に、お堂が聳ねて居る。お賽錢を投げて禮拜した。傍にひざまづいて何事か一心不乱に祈禱して居る婆もある。境内の立木の焼けて居るのに驚いた。勿論震災の時、周圍が悉く焼けて、この立木まで焼けたのだらうが、なせお堂だけ焼け残つたのか？人或は觀音様の御利益とするか？さすれば公平な佛、人を救ふべき觀音様が數萬の死者を餘所に見て、獨り残られたか？暗い境内を抜けて夜の都を彷徨ひ、歸館の後故山の親に今日の行程を報ず。不夜城の都の空もシン／＼更けて行く。

十六日（第五日） 東京——日光

午前七時靜修館を出て營養研究所帝大見學、午後一時半上野驛集合。

二時發の汽車で日光に向ふのである。時刻が來ると乗客は一齊に改札口に流れ込んだ。氣笛一聲早我が汽車は離れて東北線上の人となつた。客も重々しい東北の人たちが多い。上野の山をグルツと廻つて、樹木が多い中に二階家などの多い村里を右に見てやがて汽車は日暮里に着く。「常盤線成田水戸方面行きのお方は乗替」と言ふ車掌の聲が聞える。汽車は車輪の響と共に

環の様に取まいて居る所もある。廣い高原にはつづじの花が一面に咲いて、綺麗な水が瀬を成して流れて居る。

汽車は努力する人の様に一步一步喘ぎながら登つて行く。高原灌木の林又高原と駛つて居る。汽車の機關の音が凄しくあたりに響いて聞ゆる。やがて大谷の川原の石原が杉並木の間から見ゆ出して来る。汽車は杉並木の街道を横切つて、そして停車場へと着いた。さといよ／＼日光に入つたのだ。

停車場は綺麗で明るい。遊覽地特有の客引が澤山出てゐる。宿屋から旗を持つた人が吾々を出迎へに来て居る。徒歩組と電車組に別れた。町は爪先登りになつて、羊羹を賣る家と、名物細工を賣る家と、湯呑などを賣る家が軒を連ねて居る。そして旅館の大きいのが段々現はれて来る。神橋停留所で降りて宿に入る。神橋館である。男體の山よりたぎり来る大谷の水は、脚下に白布をさらして去り、杉樹小暗き間より一帯の神橋雨後の長虹の如く、蒼々たる暮色の中に横たはつてゐる。

× × ×

吉田 諦成
齋田 幸次郎

五月十七日。氣持の好い朝の冷氣にふと目覺めると枕元に中川先生が立つて居られる。はつとして床を蹴つて飛起きる。「おい、もう起きんか」といふ先生の聲を夢の残りで何か呟く。寝呆け顔が幾つもある。五時五十八分電車だと聞いて、ともすれば合同説を主張する目臉を漸く支へながら洗面所へ行く。直ぐに御膳立が出来来る。味噌汁と玉子焼の御馳走にあはたゞしく飯をかき込んで外に出た。宿の横手を出ると直ぐ其處に大谷川の清流が川底の石を美しく流ひながらさ／＼やかな音を立て、流れてゐる。朱塗の神橋が水に映じて又入の美しさを添へてゐる。と折柄の朝日に金の擬寶珠が燦然と輝いて我等は思はず快哉を叫ばすにはをられなかつた。

其中に電車がやつて來たので、一同乗車してガダゴト揺られながら馬返しまで運んで貰ふ。此より華嚴の瀧を見んとして三々五々打連れて二里餘の坂道を登る。

坂は至極平坦であるから車馬が通行してゐる。其れでも汗だくだけの態。もう餘程來たと思つては山から下りて來た人に遇ふ度毎に、「もう何の位ありますか」と聞くとも誰かが定つたやうに「もう直ぐですよ」と云ふが其直ぐが容易な事でない。二時間餘にしてやつと峯に出る。此邊は一帯に薄霧が立こめて誠に清々しい。思はず胸を擴げて深呼吸をやるに、宇宙の大氣を一時に吸込んでしまつたやうな氣持がする。實に日光の神仙境とも云はれよう。

此所より手柵に依つて、石のごろ／＼した小徑を降り瀧壺を見に行く。途中に小さい瀧がかゝつてゐる。白雲の瀧と云ふのだ。汗ばんだ顔に美しい水の飛沫を浴びて涼しい。此處に鵲の渡せる橋を過ぎ、道を阻む水の流れを飛越えて愈々目ざす瀧壺に來るが満山の若葉皆靜かなりで、唯數條の小便瀧を見るのみ。茶屋の婆さんの話に依ると今年は旱天で落ちないとの事だ。直下四十丈、轟々として千丈の碧潭に飛躍する大瀑布を豫期した我等は甚しく失望した。何となく物足らない心持で一同は再び元の道を喘ぎ／＼引返して昔をしのぶに、名も幽しい五郎平茶屋に憩ふ。暫くして中禪寺

湖に行く。湖の大きいさ東西二里、南北一里、周圍五里の大湖で殊に其風光宜しく、周圍を圍む峯巒は湖面に濃き翠緑を映じ、折柄の雨に又一入の趣がある。霞の中に高く聳ゆる男体山を後に、雨を衝いて馳下つた。再び電車で東照宮前に下車、晝食後、別格官幣社東照宮に參詣する。

先づ表門より入るに、東照大権現の扁額を掲げて石の大華表がある。石階を経て内に入ると、神庫、神廄、花崗岩の手水鉢があり、こゝに並んで諸藩主の寄附した大小の燈籠數知れず、嚴然として往時徳川幕府の威を語つてゐる。再び石階を登ると正面に燦然と輝く陽明門がある。屋根は悉く銅瓦を以て覆ひ、柱には皆美しく彫刻し、天井には狩野氏の筆に成る昇降二龍が畫かれてゐる等眞に善美を盡し、巧緻を極めたもので、己に我等は此日本美術の粹に陶醉してしまつて、唯呆然たらざるを得ない。日暮門の名ある、誠に宜なるかな。幾組も幾組もの參詣者の團體が詰めかけて來て、知らず／＼の間に、押出されて唐門に至る。此門は門扉に至るまで悉く唐木を以て作れるが故に此名あると聞く。陽明門の善美に比して又幽玄な趣がある。進ん

で拜殿に行く。此處も美しき彩色、巧みな彫刻を以て飾られ衆目を眩す。金網を張つた化燈籠を見て歸途に附く。鬱蒼たる杉並木を通る時、自ら崇高な氣分に充ち充ちて、當に去らんとする日光を想ひ、

あらたふと、青葉若葉の日の光りの句を泌々味ふ。

一先づ神橋館へ立寄つて旅装を整へ、長途の旅行中で最も印象を深うした日光を發し、上野驛に着いた頃には、既に電燈が花の都を飾つてゐた。

九時、東京停車場に集合を約して散會。銀ブラをやつて土産物を漁る者、親類知己に挨拶に行く者等、思ひ／＼の行動をとつて、東京驛に集合した。

九時半東京驛出發、品川も過ぎ懸て六郷川を渡れば程なく横濱につく。海水浴場に名高き大磯音に名高き箱根の關、獨り聳ゆる富士のすそも夢のまにすぎ、大井天龍を渡る頃東海の端に漸く明け、ほのくらし光明波上に漂ひ、静岡もすぐる頃太陽東天に高く金の鯨に名高き名古屋も程なく、これより鐵道北に折れ岐阜の金華山、長良の鵜飼、關ヶ原の古戰場も汽車の走るが儘に青葉の中に輝く金龜城の白壁懐かしい彦根の驛に

昔元弘年間賊軍を導びきし村なりといふ事であつた。説明によれば四十戸許りだそうだが三戸程しか見ねなかつた。此の石の下は賊軍の通りし間道なりと聞き一同感慨無量であつた。

蟻の戸わたりを過ぎ、不動の崖を左に見、ほら吹き岩を右に見て、私等は行宮趾に參拜した。

昔後醍醐帝が賊人北條の爲に斯様な淋しい所を金枝玉葉の尊き御身を以て長らく行在となされ、人民塗炭の苦しみを除かんとしたまひし御計畫も破れて、遙か彼方に望む有王山迄、夜晝三日供御もなく、人目を忍ばせ給ふた歴史を追想して涙の出づるを禁ずる事が出来なかつた。

山を下つて乗車し奈良に向ふ。午後一時十八分奈良につく。奈良は静かで感じのいい町だ。一行はうるさい荷物を旅館菊屋にあづけて奈良見物に出かける。

二三町も行く猿澤の池に出る。左に高く興福寺の塔がそびえてゐる。此處をすぎて春日一の鳥居についた此のあたり奈良公園で狎れ鹿の三々五々打ちつれて、行客に食を乞ふ様が又なく可あいらしい。奈良は實際詩的な舊都だと感じた。

つく時に正午。

終り

第四學年旅行記

第一日奈良和歌山、大阪方面修學旅行記 麻生龜吉
五月十二日

學生時代中一番楽しいものが修學旅行だ。それが今日となつて五時半彦根驛集合、足立先生の御見送りで六時九分發汽車の人となつた。京都の驛で待つ事約一時間午前八時三十六分奈良線に乗りかへ、次に木津にて關西線にのり換へて、十時三十四分笠置についた笠置山に上る。笠置は一寸した、先づ多賀程の町だ。けわしい山路を上つて名切石に着いた。前の一面の谷は北條軍が奈良般若寺の僧徒のため粉碎された所である笠置寺等を拜して、胎藏界石、金剛界石を見物した。漢文で習つた笠置山の記の中の如く偉大なものであつた。頂上にて御勅、文珠、藥石の三石を見物した。夫々一個の佛像が石一杯に彫りつけてあるのは驚異であつた。皆磨滅して胎内寶をくぐり、大鼓石、平等石をへて搖ぎ石に至る。此處より遙か東方に飛鳥路村を望む

鹿の籬を見物した。此處の前庭は、毎年鹿の角切り場で其の時は昔ながらの儀式が行はれる。春日第二の鳥居をくぐつて春日若宮に詣で本殿へと志す。途中竹柏の保護林を見學した。學術上有名な林だらうが、私達には何の感興も起らなかつた。南門をすぎて、直會殿にて正成の鎧を見物した。此のあたり參拜道の兩側石燈籠多く、初午の万燈の華やかさを偲ばしめる。本殿を拜す。結構至り盡せりである。七種の寄木を見てから、手向山若宮に詣で、八幡宮に參拜す。

この度は幣もこりあへず手向山

紅葉のにしき神のまに／＼ 菅公

正倉院は古代美術の粹を集めて、建物は校倉式である三月堂に行く。三月堂は奈良第一の古建築で乾漆作りの佛像が珍らしい。二月堂は三月堂の下にある。堂の隣りには有名な良辨杉がある。奈良の都は見るものさわる物、きく物一として古の姿、古のひびき、古めかしい感を感じずにはゐられない。京洛の名所多きを以てしても、奈良の閑靜には必敵し得られないだらう大佛殿の入口の仁王を見物す。古名匠運慶堪慶の作だけで、はりきつた筋肉鋭い眼つき鬼氣人にせまる感がし

た。大佛殿は相かわらず大きい。「大佛は見る物にして尊ます。」と川柳子は言つた。私等にも同様何等崇敬の念も起らなかつた。勿体ない限りだが。

帝室博物館は古美術の粹を集めて、見る者をして感歎の聲を發せしめる。興福寺に向ふ。此の寺は奈良最古の寺院で全部で四棟、特別保護建造物である。其の五重の塔は、奈良驛降客が猿澤の池と共に先づ目につける所のものである。實際猿澤の池と此の塔は相はなるゝこと出来ぬ對照物である。北圓堂は藤原不比等追善の爲創立せられたもの。南圓堂は藤原冬嗣の創建で其の崖下西手に三重の塔がある。待賢門院の本願によりて建てられたものである。長い奈良見物を終へて、午後四時大軌電車にて生駒山に向つた。ケーブルカーにより登山し、先づ聖天様に參る。多くの參拜人が雲集してゐた。崇徳不動とか申す堂にて一憩して後奈良へ歸る。楽しい旅行の第一夜が訪れて、一同十時迄自由散歩。早くゐねた人が何やら、につこりと微笑んでゐる。思は故郷にとんでゐるのだらう。

五月十三日（第二日）

山本捨三

異郷第一夜の夢も破れて出て見ると奈良舊都の空も

漸く明けて白い陽の光は僕等の前途を祝福してゐる様である。七時奈良驛に集合、七時二十分の汽車で法隆寺に向ふ。車窓から望む朝の景色は心地よくひらけて青葉もゆる連山緑なす田畑はさすがに春らしく輝いてゐる。七時四十三分法隆寺驛着。十餘町で法隆寺に至る。此の寺は今を距る一千三百有餘年前、推古天皇即位十五年に天皇及び聖德太子相共に發願して用明天皇の寂願に副はんため建立し給ふた大伽藍で法相宗の大本山である。佛像堂塔は飛鳥藤原奈良足利鎌倉時代に渡つて作られ其數多し佛像の微妙微密壁畫の精巧美麗規模の宏大なことには今更ながらに驚いた。宗教上歴史上最も重要な位置にあつて實に世界最古の木造建築物として巖然昔のまゝである事は實に本寺のめでたいところである。法隆寺參觀後龍田に至る。龍田川の清く流るる水と水邊に沿ふて並んでゐる青葉の紅葉は、青と碧とよく釣り合ふて春の氣分を描き出してゐる。秋はもつともよくて龍田川の錦である百人一首に。

あらし吹く三室の山のみちばは

たつたの川のにしきなりけり

龍田神社は天の御柱國の御柱の二柱を祀る、

王寺より信貴生駒電鐵によつて信貴山に參拜。

延喜年中明達上人の開基にかゝつて毘沙門天を祀り、近畿地方の信仰の的となつてゐる。石だゝみの道の兩側の獻燈數知れず、上に従つて朱塗の佛殿多くなり人も亦加はつて頂上の本堂前には蟻の様に集つてゐる樹木の植込み、石の配置も心地よく、此の寺の繁盛の程も思ひ知られる。高田櫻井を経て初瀬についたのは二時であつた。初瀬寺參詣。登る石段の傍にそふて牡丹があつて、よく手入れされ、今を盛と赤白紅入りまぢつて咲いてゐるさまは、げに長谷の牡丹とて地方に名高いのも理あることである。充分僕達の疲勞を慰めてくれる。當時は觀音大士の靈場で眞言宗新義派の學寮、又三十三所の第八番であるため參詣者ひきもきらない。本堂は八棟造本尊は十一面觀音といつてゐる。境内の櫻も好いさうだ。櫻井に引き返し徒歩多武峯に登る。此の時四時半驛より麓まで約一里麓から頂上まで畧一里あるこの話。

僕はさすがに吐息をついた。……然し此の時僕の腦裏に何ものかが閃いた。——勵め！進め！赤い血潮に燃わたつ我等彦中健兒。我等はあの金龜城下に育つ

赤鬼男兒だ。險を見て猛進し難に臨んでは奮躍する赤鬼健兒ではないか。僕等の元氣は油然として湧き出た「山路に沿ふ川の細まりて岩石兀々と出で碧流激して飛沫をどばし、急に宏がりて深淵をなすところ、登るに従ひいよ／＼奇にいよ／＼美に筆舌に盡しがたし。羊腸たる道路。鬱蒼たる樹木四氣冷然として、鳥の聲すら聞えず將に暮れんとする黒碧の空（すりばちの底の様）に岩に激する河聲の響くを聞くのみ。莊嚴なる神秘の世界に突入したる時悚然たらざるを得ず。」幾多の艱難辛苦の後に旅館を前に望んだ時の悦びさ、喜しさは、今でも目の前にあり／＼と浮んでくる。朝町屋旅館に投宿。茶話會を開く。東林先生の謠曲に始まり生徒のハーモニカ吹奏、江州音頭等あり東林先生のおはこ？腹藝で幕をどじた。文字通り愉快に終つた多武峯は頂上に藤原鎌足の墓がある、齋明天皇田身の峰上に離宮を作り給ひ、持統、文武二帝も亦行幸なされた。二規宮と號す。談山神社は北面にある。初鎌足の墓所にその子定惠寺塔をたてた。祠廟は嘉永二年重修し今別格官幣社に列す。その壯麗なことは州中第一で「西の日光」の稱がある。境内には櫻、楓が多い。

谷深く分入る多武の山櫻かひある花の色を見るかな
藤かつら絶ね根ざしをさめけるあともかしこき
多武の山寺。

回合岡鬱氣勢騰 輝煌金碧廟廊層
風雲一体君臣業 山背誰語天智院

(第三日)

西村 榮次郎

五月十四日

枕下に激する溪聲に第三日は多武峯から明けそめたすが／＼しい朝の山氣を吸ひ込んで、再び談山神社に詣で、神職に導かれて寶物を拜觀す、古の香ゆかしき壁額、刀劍等、結構つくせる廟社と相俟ちて燦として往古藤原氏の繁榮を物語る。因に堂塔は白寶年間改築され其後焚燒して現在のものは嘉永二年の改修に係り獨り五重塔のみ災禍を免れて現存せるものと。午前八時半旅館を出で標高千六百七十五尺の多武峯の山腹を廻ること一里近くして西國札所七番岡寺に着く。地は躑躅の名所として有名だが極くつまらないものだ。それより徒歩にて聖德太子の創立に係ると云ふ橋寺を過ぎ久米仙人で名高い久米寺の境内を通り漸く畝傍に到

り、先づ神武天皇御陵を拜し、次で橿原神宮に詣づ。折しも曇り切つた空は到々泣き出して、連日の好天氣の報ひが來た。難を神宮前停車場に避けて晝食、一時十八分、大軌吉野線に乗り込みいよ／＼目指す吉野へと急ぐ。小雨降りしきる壺坂も通りだん／＼山路を登つて行く、一時五十三分吉野驛着、驛前に小憩の後各々携帯の合羽を引被つて森脇先生を先登に霧深く罩むる美芳野の山路を辿る。何う間違へたものか、裏道づたひに登つてしまつた、本道より險阻だがずつと近いそれに頻繁にゆきかふ自動車に惱まされないのが有難い、約一里餘登つて中の千本近くの旅宿「辰巳屋」につく、既に自動車で先陣してゐる輩もある。一同揃つたと見て案内人に導かれて吉野朝宮趾に到る。櫻花既に散じて満目は總て青葉、最も南に倚れる要害として後醍醐帝の選び給ひし、此の地より遠望すれば吉野の奥は烟雨の中に模糊たり。此處も遂に陥りて恐れ多くも帝は山亦山を踏み越えて無双の要害賀名生に落ちさせ給ひしと聞く。引返して藏王堂に大塔宮最後の悲痛な御宴を偲ぶ、堂は金峯寺の本堂、十八間四方高さ十一丈二尺、特別保護大建築物なりと云ふ。次で後醍醐帝

を奉祀せる吉水神社に詣で、天皇の震翰、御製、和歌等の寶物を拜觀す、附屬せる建物には源義經が一時難を避け、靜御前と別離の宴を催せし室あり、薄暗い其の室には彼の哀史が秘められてゐるのだ。それより中千本のつづら道を辿つて如意堂に至る、如意輪寺は南朝代々の勅願所にして、彼の正行の辭世を以て名高し今も其の扉は寶物として收められ其他吉野朝に關する書畫、和歌を藏す。雨降りしきつて吉野山は暮れて往つた。庭園で有名な竹林院はまだまだ遠く歩を延ばすよしも無い。止む無く宿に引返す。外出は九時まで許さる、五月雨に燦る燈を慕つて三々五々暗に吸はれて行く者が多い。

五月十五日

西脇 仁一

五時半起床。出發七時。野間先生の先頭にて道を本道にとり、途中村上義光の墓に詣で、吉野神宮に參拜し、ありし昔を回顧して、感慨無量であつた。八時三十分吉野驛發、吉野口驛にて和歌山線に乗りかへ、十一時前高野口驛に着いた。驛前の葛城館にて晝餐を喫し荷物をあづけて、高野登山の途に就く。行くこと十

町餘り、紀ノ川の渡を渡り弘法大師の母の御廟なる自尊院にて女人高野の由來を聞き、道を急いで九度山下の眞田氏の閑居を訪れる。それより本道に出で、見れば、靈場の高野山も文明の光に溶して、自動車は頻々として往來し、電車も今や山麓の椎出迄通せんとしてゐた。山水の紫明に反して、路傍の癩病患者の乞食の姿には憎惡の念迄生じた。清湍に沿ふて行く事三里餘にて朱塗の極樂橋に至る。高野山も最早近からんと一同元氣恢復してしばらくにて女人堂に至る。聞く、昔は此の堂より奥へは女人の入るのを禁せられてをつた。之よりすぐ高野の町に入り、漸く宿坊福智院につき、落伍隊の到着を待つて、一同勢揃へした。時に四時前であつた。國立靈寶館に各々五拾錢奮發して、弘法大師に關する寶物を拜觀した。古器物、古名畫に一驚を喫して、眞言宗大本山金剛峯寺に參詣す。關白秀次の自殺した「柳の間」狩野探幽の名畫の説明を面白く聞いて其處を辭して刈萱堂に至る。雖僧の淀みな刈萱道心親子の哀れな物語を傾聴した。暮色蒼然として、うす暗い、石疊みの道を行く途中不幸雨に祟られて、重い足をひきづり道を急ぐと、案内

人の兩側に林立する石塔の説明も耳に入らず、唯彦根城主井伊家の美しい御廟のみを印象して、奥の院に参拜した。

飢いさと、疲れて一同さうらうと福智院に辿りついた八時半になつて、やつと精進料理にありついてはつとしたのであつた。

× × ×

五月十六日

小林 英太郎

午前四時起床との豫定にも拘はらず一同寢足らぬ夢の尾を辿り、せき立てられる先生の聲も夢路の舞臺に現れて、假寝の宿との念何時しか去つて温き家庭で一夜の夢を結んだかの如く感ぜられた。そこへ寢足らぬ眼を擦すりつゝ、精進馳走の食事に今日の原動力を貯めて、五時過ぐる事三十分下山の途に就いた。四方深く霧こめて、流石は高山冷氣身に染み思はず襟を正した。一行豫定より遅れた爲溪流奇峰の間を駈足にて下つた。昨日の上りに引換て今日の足の早さ。喘ぎ／＼高野口に着けば怨めし汽車は數分前囁々たる煙と共に彼方に沒したとは、一同失望の極に達した。此所にも時の威大さが味あはれる。既にして午後一時半高

野口を出發した汽車は縫が様に紀の河の沿岸をひた走つた。顧みれば高野山雲煙模糊たる中にあり、依々として相送るが様である。前日來の疲勞一時に發し車中あちら、こちらに於て樂しき故郷の夢を結ぶ者有り。紀の川を渡つて汽車はホット和歌市驛に息をついだ。一行は電車にて紀三井寺に向つた。寺は名草山の中腹にあり、西國三十三所第二番の札所である、曲折又曲折を躡む事數を知らず。眺望絶佳、天下の勝景此所に集り、俯瞰すれば勝景一望掌に在り。去つて和歌浦に赴いた。川にみかける玉津島神社を拜し。進む事數町にして達した。

細波岸を洗ひ沖行く白帆の影も一入なつかし。此所に一人の頼山陽あらば如何に和歌浦の名聲をあげる事だらう。平凡な我等の目では天下に冠たる詩歌の出やうはすがない。倉皇として立ち去り、新和歌浦に至る。和歌浦の陰に對して陽にして男性的美なり。

時迫まり和歌山市驛を去り南海電車の人となつた。

時計を見れば三時。行先は今宵の宿大阪である。紀の河の大鐵橋を渡り電車は、山と海との間大阪灣に沿つて火花を散らして北進す。淡路島水煙渺茫の中にあ

りて白帆と相映じ、水天相連る所須磨の勝地と思はれる。海面より來れる涼風遠來の客の面を打ち、目には白砂青松、耳には波の音、電車の音、其の快又他人の想像を許さず。山海の勝此所に窮まり、風概比なく真にパノラマの景の如し。

時経ち盡きせぬ思を残して龍神驛にて下車した。

一行水族館へと足を運こんだ。館外の鯨骨、館内の數多き珍らしき魚湖國人をして喜ばす事大なり。暮色は旬ふが如くやつて來た。電燈の光點々輝き其の昔繁榮せし堺港の殘骸に一入の悲哀を感じた榮枯盛衰の習とは云へ如何にはかなき事よ。今日關西旅行にある我等の運命も亦然り。彼と私とを較せし時懷古の情油然而して生じ黙々として立ち去つた。

再び車中の人となつた。七時過ぎ夕闇濃き難波の驛に着した。幾多の電燈、イルミネーションにて彩られたる肆廓の間を通つて程近き日本橋の宿に着せり、店頭

明日の天候がうたがはれるだが眼前の景は其んなけいは無い。

肆廓の交錯燦として眉睫に列し、店頭を飾る電燈さてはイルミネーション、都の夜は晝の様である。不夜城の街路を走る電車の軋る音。自動車の瀑音、流石は活動の都なり、詩的、歴史的都を訪れ來たりし我等は此の都に對し一種異様の威力を感じたり。提燈一つ吊せる貨ボート至る所の河川に満ち／＼てゐる、ギョと云ふ鰯の音水面に點在する紅玉の光、眞に此の物質的都市に對して或る詩的情緒を加ふ。

十二時點呼行はる、一同遅れず宿に歸り修學旅行最後の夢を結んだ。床に就きし我等の腦中には、奈良の鹿五重塔、吉野、和歌浦それから、これに走馬燈の如くに循環す。はては夢と結すびて我が胸の記憶する所には非ず。

× × ×

第六日

麻生 龜 吉

五月十七日 曇後晴

楽しい長いと思つた修學旅行も、早今日一日となつた宿屋を七時二十分に出發して大坂城に上る。太閤一世

の豪奢の遺物だけあつて、城でも石垣でも盡く豪壯なものである。振袖石、蛸石は石垣の石中でも最大なものである。天守の傍に大阪市水道水源池がある。天守に上つて大阪市を鳥瞰する。東方は工業盛に、煙突は林立して煤煙空をおほうて天守の方に流れて来る。日本のマンチエスターだ。城内をぶらつくこと半時間後砲兵工廠を約一時間半許り見学する。この室も機械ばかり、最新の文明の利器を使用して一人の職工善く昔の千人の仕事をするといふ有様である。寫真で見たクルップ工場もかくあらんかと思つた。耳を豊せんばかりの機械の運轉の音、ハムマーの響、壯大の極みであつた。世界有数といふ四十三糎の大口徑砲を見學した外へ出て見ると今迄の喧々騒々たる響は何處やらへ、今ちつた許の櫻が青葉若葉を茂らせてゐた。朝日新聞社見学。最初入るより早く、活版インクの臭新聞紙特有のにはひがぶんと鼻をつく。第一に活字ひらひを見て、高速度輪轉機での新聞印刷の様子を見る新聞紙を一度機械にかけて、我々の毎朝よむ新聞となる迄一度も人手にかゝる事なく皆機械が作業するのであつた。新聞社を辞して一同自由解散。

指定の時刻に大阪驛に集合、長い旅行を卒へて我等は歸途についた。車中で最う一度大阪をふり返つて見ると今迄の旅がバノラマの如く腦裏を廻る。のんびりした奈良の都を散歩した。談山神社、高野山への坂道は随分辛かつた。和歌山方面、南海電車沿線は都會でみてゐた。そして大阪で一大都市となつてゐるのだと思ひは縷々としてつきない。遂に楽しい修學旅行は、四年級の時の修學旅行は去つてしまつた。

第三學年旅行記

高祖 保

今、十二月。遙かに通り越した五月十三日十四日の旅行記を綴る。甚だ追憶する處が多いことである。(十三日)午前二時の青い月かげを蹈んで彦根驛に向ふ。發車二時五十四分。車窓からはほのかな月がみね陰になつた方は夜明けの霧がひたひたとよせ迫つてゐた。京都着、四時廿分。ほの明るい。列車を出て山陰線のマツチ箱へ乗込んだ。時に發車五時八分。市街を出外れる頃から旭日が燦々と車窓を射、清風一陣。嵯峨の激湍飛沫、急流岩嚙む山谷の横つ腹をきはごく通

つて龜岡も過ぎ、綾部着七時十分。寒暖計四十九度を示す。同處發舞鶴着八時七分前。下車して後、てくてく歩いて山かげの村なごよぎる。群々と岩の尖出した白ぼけた無表情の道が可なり長く續く。晩春と初夏とが丁度山ひとつ隔て、向ひ合つてゐるかのやうに、弱々しい日射と、ところどころ拓けたさみしい田畑は黙んまりと青ざめてゐた。舞鶴の古ぼけた街頭をゆく。この町の家々は赤土の壁である、そして干物を表の方に連ね、子供達はそろひも並つて大道の中央で遊んでゐるし大人らは道で仕事をしてゐる。むさいギョチないだら／＼した、現世に採り残された街であり忘れられた町である。舞鶴要港部工作部着九時半、一同見学する。宏壯空漠な建物ドック在り鐵道など敷かれてゐる。ガランガランと鐵材に槌を加へる音が、ひっきりなしに耳をひためた。十一時十五分見學終へ此處を辞す。「明治廿七八年戰役威海衛總攻撃參加舊十八號水雷艇」などと云ふのが大きい圖体をそこの芝生に曝し尙ほ舊態依然として正午の陽を浴びてゐるのは、何のことはない。古戦の名残りである。「横須賀海兵團舞鶴練習部」と看板をぶら下げた中で晝食の辨當をひらく。

後、舞鶴灣停泊中の海防艦吾妻見学。二時終了。甚だ有益。光る海をみ乍ら中舞鶴發二時半、新舞鶴着二時四十分同處を四時出發。再びマツチ箱はきはい細道をエチエチと這つて海の遠くひらけた山上を走る。山陰線一帯は今もマツチ箱が存在する。どうも一向に開けてゐないやうだ。宮津着五時廿分、ただちに精輝樓に向ふこの街は今迄のと相違して追に明るい清新な海邊情緒を有つてゐた。溝、家並等の完備はこの小さい纏まつたこざつぱりの宮津を、居こゝちよい氣分に誘ひつれるのだ。同樓に着き、皆寛ろぐ。座敷からゆた／＼うねる與謝の海に、その向ふに、ひとすじなだらんだ「松の流れ」は音にきこゆる奇勝、丹後天の橋立である。ボンボンとエンヂンの音高い小蒸汽船、貨ボート、帆を張つた漁船、それらの背景たるべき四方の翠々たる山の緑りとは、亦夕暮れの天地に拓くる一大一抹の淡彩風景畫として充分である。それ、疑乃漁歌のそこはかとなく尾を引くのは、打見る限りの全景を一幅に収めた心理的情景である。薄霧一片また一片、ふわふわ